

## 彰考館蔵『忠信卿百首和歌』について

——「建保四年後鳥羽院百首」再吟味のために——

川 平 均

### はじめに

水戸の彰考館に「忠信卿百首和歌」と題（外題）された一本を蔵する。同書は『私家集伝本書目』や『国書総目録』にも登載されているから、既に存在の知られている資料であるが、従来特に採上げられることもなかったようである。今のところ彰考館本以外に伝本の在ることを聞かない。さて此の書の内容を見ると、「百首」と銘打たれているのに反して、実際には百首を完備しておらず、「春二十首」「夏十五首」「秋廿首」のみ、それも秋の場合、二十首に一首足りず実数は十九首で、結局、都合五十四首を収めているに過ぎない。また、五十四首中には、明らかに忠信以外の歌人（秀能・雅経）の詠と認められるもの（十一首）も含まれており、一見不完全な資料ともみられるのである。詳細のちに検討することとして、今あらかじめ注目しておきたいのは、本書の記載（作者表記）並びに本書についての所伝である。それらを吟味した上で、結論を先取りして言う、本書に載せる歌々は——無論、右で触れた他人詠を除かねばならないが——主として坊門忠信の詠であり、同時にこれ

らは、建保四年（1216）、後鳥羽院が忠信らを含む十六人の歌人に詠進せしめた百首に係わる詠であると考えられるのである。右の推定が認められるとするなら、忠信の作品としては従来知られなかったものを見出すことになり、本書は、忠信の和歌活動を考える際の、幾分か新しい材料となる点でまず注意されよう。第二に、本書は一人の歌人の動向を伝える資料であるばかりでなく、広く建保四年後鳥羽院百首について、改めて検討を加える為の機縁となるのではないかと思われる。

小稿の目的は差し当り、本書の本文を資料として紹介することにあるが、併せて、本書のもつ資料性そのものの批判を通じて、右に示した二つの広がりにおいて若干の考察を試みたいと思う。

### 1

あらかじめ本文を紹介しておきたい。最初に本書の書誌的な特徴を略記し、次いで翻刻を掲げることにする。

本書は、彰考館の函架番号、巳一四・〇七三四六。縦二六・七cm 横一八・六cmの一冊本。薄手の鳥の子紙二枚を貼合わせて一葉と

し、二折の列帖装に仕立てである。表紙は薄朽葉色の鳥の子紙。同左上に「忠信卿百首和歌」と外題を打付書する。内題は無く、直ちに部立名並びに作者名があつて、以下和歌を書く。一面一〇行、和歌は一首の上下句を分けて二行に書く。本文墨付六丁。江戸初期写。奥書は見えないが巻末に貼紙一葉あつて、本文と同筆かと思われる手で勘註を記してある(その内容については後述)。巻頭に「彰考館」の瓢形陽刻朱印を捺す。

翻字するにあたっては、字体を通行のものに改めたほかは、仮名遣いを初めとして元の形を保存した。なお、丁の変り目の印、歌頭の通し番号、括弧中の註記等は私に付したものである。

### 〈翻刻〉

#### 忠信卿百首和歌(外題)

春二十首

#### 中納言忠信

- 1 今日よりは君かちとせの春の色に 　　いつるひかけのよろつよの  
　　そら
- 2 あしひきの山のはさらす春かけて 　　ゆきのうちよりかすむそら  
　　かな
- 3 いかてかく春はとやまのあしたより 　　雪のしたなるうくひすの  
　　こゑ
- 4 うくひすのはにをくしもはきえにしを 　　嵐やさむきまとのくれ  
　　たけ」一〇
- 5 ふりつもるゆきにしほれしやま人の 　　みのしろころもいまやは  
　　すらん

- 6 山ひめのやなきのいとあさみとり 　　かすみをかけてふく嵐か  
　　な
- 7 やまかけやゆきとのみちるむめかえを 　　はかせにさそふ鶯のこ  
　　ゑ
- 8 なにはつにひとむらかすむ梅かえの 　　さくやこのめにゆきはふ  
　　りつゝ
- 9 山川にきゆるこほりのいはまより 　　はる風さそふなみのはつ  
　　花」一ウ
- 10 春雨のふるさとにしもぬれ／＼て 　　しゐて雲井にかへるかりか  
　　ね
- 11 かすみゆくあまのかこ山いつる目の 　　のとけき色をうくひすそ  
　　なく
- 12 しほりするわか跡とはん人もかな 　　ふかき山ちの花のゆくゑに  
　　ちりまかふざくらにまさるやま川の
- 13 いはなみたかく春風そふ  
　　く
- 14 志賀のうらやうみふく風にしたはれて 　　さくらそ水のなみのか  
　　よひち」二オ
- 15 たつねきて霞にうとくちるはなを 　　へたてなはてそ春の山風  
　　またもこん心にとまるあしのやの
- 16 なたのしほやの春のあけは  
　　の
- 17 いそのかみふるきまかにちるはなの 　　うつるかたみをたれに  
　　とはまし
- 18 みよしの／＼たきのしらいと春をへて 　　さくらにまさるむかしと  
　　そ見る
- 19 たつねこしおなし人をやゝとのまつ 　　さくらのゝちにかゝるふ

ちなみ」ニッ

20 おしましよとをさかりゆく花のかに わか袖のうへのはるはく  
れにき

夏十五首

21 よしのかははなのかゝみにみさひゐて ありしにもあらぬなつ  
こかけ哉

22 いとしくなくねもさひしほとゝきす ふかきみやまにたつね  
きぬれは

23 有明の月のかつらのさとなれは 光もきよしなつの山かけ  
庭もせに風におきふすさゆりはの」三オ なひくにおつる五月雨  
のころ

24 夏ふかき野中につらきわすれみつ くさはをわけて月をすみけ  
る

25 五月雨にぬれてはとはぬやまちは わか身につらきうち川  
なみ

26 たつねみんなしもあらし山かつの かきほにかゝるゆふかほの  
花

27 まぎのとにひとりなこりをしのゝめや やまほとゝきすなく  
くそきく

28 たゝにほへしるもしらぬもふるさとの」三ウ むかしをのこすの  
きのたちはな

29 夏草のふるさおもひのしたこかれ 行方しらぬむさしのゝ原  
(ママ、かノ願カ)

30 なかめわひぬ五月雨しけきあさちふの のきのあやめのすゑの  
しらつゆ

32 あしの屋のわかすむかたにはるゝ夜の そらにまかへるかゝり

火のかけ

33 つゆまかふ日かけになひくあさちふの をのつからふく夏のゆ  
ふ風

34 あはれにもわか身にあきのちかつきて」四オ さかり過たるもり  
のしたくさ

35 かはなみにせゝのたまものうちなひき またみこりの秋風そ  
ふく

秋廿首

36 袖にまたつゆをさそひてくるあきも わかためにやはおきのう  
は風

37 あふせなをうきつのなみやさはくらん 秋こく舟のよるへはか  
りに

38 風にゆく雲のみをなるあまのかは はやくそうつるほしあひの  
そら」四ウ

39 やとれ月をのかすむのゝをみなへし ひとりしほるゝ花のした  
つゆ

40 夜やふくる月やをそきとなかめても なをつれなきは山のはの  
(ママ)  
空

41 ちゝにのみおもふ思ひもこゝろから わか身ひとつの秋のよの  
月

42 をみなへしたかしらつゆをゝきそへて みたれかまさる秋のゆ  
ふかせ

43 うかれゆく袖はひとへにたまほこの みちのくさ木に秋風そふ  
く」五オ

44 かりかねはなきてうらみやたかさこの おのへの松にあきそつ

れなき

45 見るまゝにねやのひまもる月かけの うちたへてすむわれもは  
かなし

46 あれはてゝとこはさなからくさまくら かりねの月とおもひけ  
るかな

47 ゆふくれやなれてもかなしすかるなく むかひのをかの秋風の  
いろ

48 いつくにかこゝろのほかかにすまはかは 月によかれそ秋の山  
里」五ウ

49 有明の月はまたしきやまのはに をのかさま／＼松風のふく  
ゆふ日さすかとたのさなへとるたみの かまともしるき君か御  
代かな

50 ぬしやたれいくよかゝけてさらすらん なみにくちせぬゝのひ  
きのたき

51 くれ竹のすゑこす風ものとかにて よろつよちきる雲のうへの  
月

52 うれしくもはこやの松にちよふへき 君のみかけにあひにける  
かな」六オ

53 つぎもせぬこゝろのやみのしるへして いるかた見せよ やま  
のはの月（コノ歌、三行ニ書ク）

（七行分空白）六ウ

## 2

本文は以上の通りである。最初に指摘しておかなければならないのは、前述した如く、これらの中に他人の詠が見られるという事実

である。即ち、歌頭に付した番号19・20・21・22の四首は秀能の詠であり、『如願法師集』一八・一九・二〇・二一（私家集大成番号。私家集の引用は以下同じ）に一致する。もう一群、33・41の九首は雅経の詠で、『明日香井集』七六〇・七六八に一致する。本書に収める五十四首の排列の中で見ると、これら秀能・雅経の詠は各々一纏まりを成し、かつ別々に離れて位置している。逆に両者の家集の側からつき合わせてみると、秀能の四首、雅経の九首はいずれも百首歌の、連続する一部分であり、それらが、本書の春二十首から始まる詠草群の二箇所において、あたかも元の歌と差し替えられるような形で存在しており、結果的に本書は、春20・夏15・秋19の、一見定数歌の断片の如き形態を示しているのである。一体何故このような現象を生じているのか、一概には即断しえない。追々疑問点を解きほぐすこととして、今注意しておきたいのは、右の秀能・雅経の詠は共ども、建保四年百首（以下このように呼ぶ）における両者の百首の一部である事である。この事実、両者の詠を除く歌々も又、同百首と深く関連していることを予測させるであらう。今のところ残る四十一首には、他の歌集類との共通歌を見出しえない。

さて冒頭に、本書の主たる部分は坊門忠信の詠で、かつ建保四年百首に係わる詠かと述べ、右でまた同百首との繋がりを予測したのであるが、この二点は本書の資料性の根本に関わるものであり、以下の論述の前提ともなるから、次にその検証を行なっておきたい。まず前者、作者の問題である。

本書の外題「忠信卿」云々は、後人の所為とも考えられようから、作者についての検討材料から除くとしても、内にある「中納言忠信」の作者表記は重視しなければなるまい。『公卿補任』により、

中納言の官職にあった忠信なる人物を検索すると、坊門忠信を描いて他に求めえない。しかも坊門忠信の極官は権大納言である。仮りにこの表記が本書流伝の間に後人の手により記入されたものだとするならば、忠信の歴任した中途の官職名を記入するのは不自然であろう。それ故、右の表記は後人の所為ではなく、原態を留めるもの、ないしは積極的に忠信自ら署したものとすら推測しうるのではなからうか。ともあれ「中納言忠信」の作者表記に該当するのは坊門忠信であるとして断じて差支えあるまい。従ってこれに続く和歌も又——先掲した他人歌を除けば——ひとまずは忠信の詠であると見做しておきたい。その際、忠信は承元五年(1211)正月十八日に権中納言に任ぜられ、建保六年(1218)十二月九日には権大納言に昇任しているから、「中納言」の期間は右の間である。即ち、忠信の詠だとすれば、右の期間のいずれかの時点におけるものということになる。のち程問題にする建保四年は將に右の期間内である。

ところで、歌人としての坊門忠信は、いわゆる建保期歌壇に初めて姿を見せる。建保二年(1214)二月三日内裏(順徳)詩歌合を初見として、同期の歌合・歌会に出詠、その活動は、承久の乱後の嘉祿二年(1236)遠島歌合、更には宝治二年(1248)院(後嵯峨院)百首に及んでゐる。それらの活動の跡は、藤平春男・久保田淳・安井久善各氏の論によって辿ることが出来る。先学の指摘を踏まえ、いま諸資料から忠信の和歌を拾ってみると、忠信の出詠した歌合・歌会・定数歌等の一次的な資料によって、その作品を直接確認しうるのは一三三首。次いで、新勅撰集を初めとする勅撰集や私撰集等の二次的な資料から二十八首拾ひうる。但しこの二十八首中、諸資料相互に重複歌があり、また一次資料との重複もあって、それらを整理

すると、忠信の詠として集めることができるのは一四三首である。問題の、彰考館本に見える五十四首の内、他人歌を除く四十一首は、右で集計した一四三首のいずれとも重ならない。先に述べた通り、この四十一首についてはなお検討を要するものの、一応忠信の詠と見ておけば、ここに比較的多くの新出歌を補ひうることになる。ちなみに『夫木抄』所載忠信歌の註記によれば、忠信には家集も存したらしいが、今日は伝わらない。従って纏まった作品としては、一四三首の内、宝治百首の詠が唯一であって、本資料はそれに次いで纏まりのあるものということにならう。更に言えば、宝治百首は忠信老年期の詠である(宝治二年は忠信六十二歳)のに対して、本資料に見る作品群は後述の如く、——これらを建保四年という年次(時に忠信三十歳)に結びつけて把えうるとすれば——忠信の主たる活動の舞台であった建保期の詠であり、当時における一人の作品の質や水準を窺ひうるものとして意義をもつことにもなる。

次に、第二の問題である、本資料と建保四年百首との関連について述べてみたい。両者の結びつきが予測されることは既に一再ならず示唆した通りであるが、更に検討を加えたい。ここで本稿の最初に述べた「本書についての所伝」——巻末に付されている貼紙の記載——を問題にしたい。本文を書き終えた次の面(裏表紙の見返し)に貼紙があり、次の如く記されている。

奥二写本アリ

端作位署如本若草安本歟

建保四年

九人

或記云十六人云

持本実範之

下段左端の「持本（姓を示すカ）実範」はこの勘註の註記者を指しているだろう。先述の通り、勘註の筆は本文のそれに同じと見られ、実範は本文を書写した当人であるかも知れない。この実範なる人物については、本書の書写されたと思われる江戸初期頃ないしはそれ以前の人という以上に、今のところ、誰某であると特定しえない。その註記の内容は注目すべきものと思われる。以下やや詳しく読解してみよう。

(一) 上段の「建保四年」は、本書の五十四首を、同年の詠に係わるものであると認定して記したものと考えられよう。

(二) その右傍にある「奥ニ写本アリ」は、本書が書写した元の本には、五十四首の奥に、更に別の本文が存したことを言っているのであらうか。

(三) 下段の「九人」は、歌人の員数と考えてよいであらう。とすれば、建保四年の或る催しに九人の作者があったこと、又は九人の作者の詠が存したことを意味しているかと思われる。前項(二)と結び合わせて合理的に読めば、本書の元になった本には、今見る五十四首の奥に、建保四年の或る催しにおける、九人の詠草を載せていた、との意にも解されよう。

(四) 「九人」に続けて「或記云十六人云」とあるのは特に注意される。もとより一つの所伝を間接的に引いているのであり、「或記」の実体も不明ではあるが、これ迄の読みを踏まえて考えると、少なくともここに、建保四年の、メンバー十六人による催しの存在が示唆されていることは認められるのではないか。となれば、それに該当する催しとして、我々は建保四年百首を思い浮かべ得るであらう。

久保田淳氏の明示された如く、同百首は応製百首であって、作者は

後、鳥羽院以下十六名、右の勘註に引く所と將に符合する。この時期の歌壇に関する従来の知見に照らすと、右の記事に相当する催しとしては、建保四年百首を擬定するのが最も適わしい。逆に言えば、この勘註は、本書に収められている歌を、惣じて建保四年百首に係わる詠であると見做す上での、有力な傍証となるはずである。ところで、建保四年百首の全貌を伝えるテキストは現存していない。十六人中、後鳥羽院を始めとする八人については、家集の中や独立した百首の形で、各々の百首全形を知りうるものの、他は、諸資料から百首の一部を拾いうるに過ぎない。それ故、以上の推定が認められるとするなら、本資料によって、同百首のメンバーの一員であった忠信の詠を、幾分か補充しうることになるのである。

(四) 下段一行目は、本書に収められている詠草についての註記であらう。即ち、本書は端作に特定の標題がなく、直ちに部立名と歌本文から始まっている事、並びに、位署に「中納言忠信」とあるのは、元の本の通りである事を言うのであらう。この註記によって、本書の今見られる形は、元来の形（或いは本書の原態）であったことを知りうる。更に重要なのは、端作・位署に見られるそのような現象を踏まえて「若しくは草安本歟」と註している点である。この言葉は、建保四年百首と結びつけると一層よく理解できると考えられるのである。即ち、同百首は後鳥羽院に上った応製百首であるから、当然上呈するに適わしい様式の端作・位署（<sup>7</sup>）を持っているべきなのに、そうなっていない事、剩え、一見百首歌の如くでありながら、大巾に歌を欠いていてその体を成してすらいらない事等を不審として、詠進する以前の草案本であらうかと推量した、という意味に解しうるであらう。

以上、推測を多く重ねる物言いではあるが、仔細に見ると、巻末の勘註は、本書の詠草と建保四年百首とが深く関連していることを伝える資料であると考えられる。結局、第一の、作者についての説、第二の、右で採上げた勘註の記載に基づいて、先掲した詠草群は、坊門忠信の、建保四年百首に係わる歌であるということとを積極的に認めてよいと思うのである。

さて右の推定に立脚するとして、次に問うべきなのは、そもそも忠信はどのように建保四年百首に関与したのかという問題であり、更には、本書は何故、百首ならぬ今日見るような形態を示しているのかという疑問である。

### 3

忠信は建保四年百首の一メンバーであった事、そして百首、そのものを詠進した事はいずれも疑い得ないであろう。なぜならば、現に忠信の同百首の詠として次の三首を知りうるからである。

(建保四年院御百首に)

権大納言忠信

(a) 立田山朝霧かくれ鳴しかのこゑの色なる秋かせそふく

(万代集・秋下)

建保四年院御百首

権大納言忠信

(b) 年ふともかはらし心しらま弓いるさの山のみねの稚しは

(万代集・恋三)

(百首の歌たてまつりける恋歌)

権大納言忠信

(c) わがこゝろやみのうつゝはかひもなしゆめをぞたのむくるゝ夜にと  
(新勅撰集・恋三・838)

(a) には詞書は無いが、前の歌(慈円の同百首の歌、拾玉集3647)の

詞書に右記の如くあり、当然それは(a)にも及ぶはずで、(a)は忠信の同百首の詠と認めうる。次の(b)は夫木抄にも、忠信の「建保四年百首恋歌」として入集(雑二・山)している。詞書を信じてよいであろう。(c)は、(a)・(b)より先出の資料である。(c)の詞書も又実際には空白であるが、やはり前の歌(前関白Ⅱ九条道家)の詞書によるものである。但しそれには建保四年百首と明記されていないが、当の道家歌は後に触れる『道家詠草百首』によって本百首の詠と確認できるから、(c)も同じ折のものであると推定される。注目すべきなのは、(b)・(c)は共に恋歌である事である。ここで建保四年百首は、四季・恋・雑の部立百首であった事を改めて想起するならば、右に見るように私撰集・撰勅集に同百首の作として採られ、且つそれらに恋歌を含む以上、撰集資料として百首そのものが介在していたであろう。つまり忠信は百首の断片を詠出したのではなく、院の命を受けたメンバーの一員として、正に百首を上っただろう事は疑いえない。(a)(b)(c)は、詠進した百首の内の三首に他ならないであろう。但し(a)(b)(c)は、翻刻した歌々のいずれとも一致しない。となれば、詠進された百首と、本書に収められている歌々とは各々別物なのであろうか。一体、両者はどのような関係に立つのか。これ迄、本書の歌々は建保四年百首に係わる詠であると述べてきたが、次に当の「係わる」の内容を明示することが求められるであろう。改めて問いを立てれば次のようになろう。

建保四年百首に係わる作かと考えられるのに拘らず、何故今日見る形になっているのか。——この問いには幾つかの解答を用意することが可能である。大きく分けて、次の二つの考え方ができよう。

(一) 本書に見えるのは、詠進した百首の断片(一部)であるとする

## 考え方。

(二) 詠進した百首そのものではないとする考え方。

(一) を採れば、物理的な理由等により百首の一部を欠脱して、現在の形態を示すに至ったことになる。(二) の場合は、前章で検討した勘註の如く、草案本などのケースを想定することになろう。考え方としては(イ)草案と見る外に、(ロ)再案・別案であるとも考えられよう。(イ)・(ロ)を採れば、今見る形を一応完結したものと思倣すことになろう。更に、(イ)上った百首ではないものの、(イ)・(ロ)いずれかの場合で、本来百首であったものが、一定の事情により歌の一部を脱して今日の形態になった、とする考え方もありえよう。以上のどれが正しいか、勿論にわかには断じえない。むしろ我々は結論を一旦保留しておいて、本資料そのものにもう一步近寄ってみるべきであろう。ひと先ず、ここにある歌々の、形態や内容そのものに見られる性格・特徴をおさえておいて、改めて先程の解答案を把え返すことにしたい。

本書に収められている歌々には、以下のような性格が認められると思う。

### (1) 非整序性

もとより他人歌の混入があるのだから、整序性の見られないのも至極当然であるが、今言うのはその点ではない。一応忠信詠と推定しうる、1~18について見てみよう。詠み込まれている景物を追ってみると、冒頭1は、立春ないしは初春を主題とするもので、その内容は「春二十首」の劈頭に置かれるに適わしいが、第四句「いつる日かけの」と類似の語が11にも「いつる日の」と見える。「いつ

る日」はやはり立春・初春の映像であろう。それが、一首目は当然としても、間を置いて春の中間辺りに再度現れるのは奇異であり、一種の混乱であろう。もっとも11の主たる景物は「うくひす」にあると見れば道理は通るものの、「かすみゆくあまのかこ山いつる日」の趣向は正しく立春・初春のそれなのではなからうか。又、鶯が3・4、飛んで7、更に離れて11と現れる点、残雪ないしは春雪が2・3・5・8と重なる点も目に立つ所であって、これらが並び合っている様を見ると、1~18を、例えば百首歌中の春二十首の構成に擬えてみると、著しくと言ってよい程に整序性を欠くことになるのではなからうか。

### (2) 完結性

例を秋部にとってみる。36~41の雅経詠を省き、今42~54の十三首で見ると、この完結性という性格はいくつかの点において認められる。以下簡条書してみると、①この十三首は表現内容の上から、42~49の八首と50~54の五首との二つに分かれる。42の「秋のゆふかせ」、43「秋風をふく」に始まり、48「秋の山里」、49「有明の月」「松風のふく」に至る一連には、無論秋の景物が詠み入れられている。②この一群に続くべき、冬の歌々は見えない。③しかし恋の雰囲気の色濃く伝える二首がある。45「ねやのひまもる月かけ」、46「あれはてゝとはさながら」は閨怨的情緒を伝えるものである。いわば、秋部の中に恋歌を包み込んだ形になっているのである。④続く後半の一群五首は「雑」に分類できよう。50の主要なモチーフは「君か御代」への祝意である。布引の滝の無窮を歌った51、万代・千代・藐姑射の松・君が御影を各々寿ぐ52・53には祝意性が濃厚に現れている。ついでに言えば、その祝意の赴く対象は



「はこやの松」に示されている如く、仙洞ないしは上皇（すなわち後鳥羽院）を指していると読む事もできよう。⑤最末歌54は言わば主体への回帰を示している。「こころのやみ」からの救済を月に託すのであるが、言う迄もなく仏教的モチーフであって、前四首に見られる祝意とは明らかに断層がある。⑥しかもこれらの一群には、45「月かけ」、46・48の月、49「有明の月」、52「雲のうへの月」、54「山の端の月」というように、〈月〉のモチーフが連続して現れている。即ち、③・④・⑤に挙げたような、必ずしも「秋」に還元しきれない側面を含みながらも、一連なりで見ると、或る種の纏まり、統一性・完結性を備えているように思われる。⑦以上を詠草全体の中と見ると、④で述べた祝意性は、冒頭1の「君か千とせ」に端的に現れている祝意と正しく照応している。更にこの1と最末54とは、呼びかける対象が一方は「公」的なもの、一方は「私」的なものというように対照的で、これら全体は極めて完結した円環構造を示している。

こうして見てくると、これらの作品群は一方では(1)で述べたように、百首歌の一部と見做すには、整序性が稀薄であるように見えながら、一方では(2)の如く、今ある形で既に一つの秩序を保持しているという、一種相反する現象が共在しているのである。

ここで改めて、本書の実体を如何に把握すべきかにつき先ほど整理して掲げた、幾つかの解答例に立戻ろう。右に述べた二つの側面を共ども含み持つのが本書であり、二つの条件を共に満たす解答でなければならぬとすれば、(1)の如く、これらの歌々を、詠進された部立百首の断片（特定の一部分）であると見做すのは、やや躊躇

されるのであり、むしろ(2)の考え方に加担せざるをえない。即ち、これらの詠は、建保四年百首に係わる詠ではあるものの、進献した百首の詠草そのものではないであろう、と推測されるのである。更に性急に解答を求めると、(2)を採るとして、先に挙げた(イ)(ロ)のいずれと見るかが直ちに問題となろう。しかしながら徒らに推測を重ねるのは止めて、ここでは、建保四年百首詠進の際に、院に進上した百首とは別に、何がしかの作品——念を押して言えば、草案・再案等々のいずれであったかは今問わないとして——を詠作するケースがあったろう事を想定しておくに止めたい。

#### 4

ところで、今し方のべたところは、もとより推測であり、仮説であるが、次に、この仮説そのものを補強しうるかと思われる材料を示してみたい。一つは『明月記』建保四年正月二十八日条の記事である。

清書仙洞百首、来月五日以前可進  
之由一昨日被仰、雖沉思不可有秀逸、仍所急進也、  
人々皆進余剰云々、盡詠僅満空外、無可相副物

これは、建保四年百首成立の経緯や、定家の対応を伝えている興味深いものであるが、いま注意したいのは傍線部である。即ち、やとと百首の歌数を揃えるのが精一杯であったという定家の慨嘆をよそに、人々は皆、「余剰」を進上したらしいと記されている点である。「人々皆」は具体的には作者であった十六人の内の何人を指すか知りえないが、この記事は、忠信においても又、百首とは別に、余剰の詠を進上した可能性があったこと、即ち、右で立てた仮説の如きケースは、実際にありえたことを証するものであろう。

次に、より忠信に引きつけて、しかも作品そのものを問題にして、右の仮説を検証できないだろうか。敢えて求めてみると、次のような例は幾分かのヒントを提供してくれるのではなからうか。

前章3の初めに引いた(a)・(b)・(c)、つまり忠信が進上した百首の一部と考えられる三首と、翻刻した歌々とを比較してみると、三首(a)(b)(c)の内、(a)と表現内容や構想において極めて類似する歌を見出しうる。それは47の歌である。改めてこの二首を並べて引いてみる。

甲 立田山朝霧かくれ鳴しかのこゑの色なる秋かせそふく

の一本  
(先掲した(a))

乙 ゆふくれやなれてもかなしすかるなくむかひのをかの秋風のいろ

(翻刻した47の歌)

甲・乙の表現は、時や場所の設定の仕方において異なるが、構想の主軸はよく似ている。いずれも、鹿の哀切な鳴き声、その響きを伝える秋風、それらに触れて一層深く悲愁をかみしめている主体、それらが構想の核になっていると言つてよいだろう。更に表現の細部を点検すると、甲・乙の表現は極めてよく対応している。図式化して示すと、

(なま)  
鳴しかの／すかるなく、(こゑの)色なる秋風／秋風のいろ、

立田山／むかひのをか、朝霧かくれ／ゆふくれや

の如くであり、いずれかがもう一方の変奏であると思わせる程である。建保四年百首の詠と考えてよい甲と、同百首に係わるかと思される乙とが、表現上、親密な類似や対応を見せているという事は、甲・乙を含む双方の資料が極めて近い関係にあり、なお且つ同一ではない事<sup>10)</sup>を、改めて示すものであらう。同時に又、双方の資料同

士は、先程仮説として考えたような、百首と、それと同じ折に付隨して詠作された詠草——「余刺」の如き——との関係に他ならないことを示唆しているとも考えられよう。

以上のように辿つて来ると、本資料は、建保四年百首の残存資料としての意義を担っていると同時に、同百首の成立を繞る問題についても、若干の問題提起をしてくれるように思われる。となれば、事は忠信一個人の枠を越えて、同百首全体の問題に関わつてこよう。従つて、本資料のもつ資料性を批判するという課題も又、もう一回り広い視野の中で行なわれなければならないであらう。

## 5

広く建保四年百首を把えるには、本百首の残存資料や関連資料を再検討する作業がなお要請されているように思われる。先にも触れた通り、本百首の全体を伝えるテキストは早く散佚したかと思われ、今日、(1)家集、(2)単独の百首、(3)諸集所載の歌、の三通りの形で一部が残存している。検討して来た『忠信卿百首和歌』は、(2)の変種、というように位置づけられよう。この(2)には、今日二つの資料が知られている。各々のもつ資料性について少し触れておきたい。

(4)『道家詠草百首』について

書院部現蔵(503・24)。本書は『弘文莊善本目錄』(昭32・10)に「光明峯寺殿百首」の名で写真版一葉と共に紹介され、のち久保田淳氏がこれを本百首における九条道家の詠であると認定された。新勅撰集以降の勅撰集や諸私撰集に、本百首の道家詠として載る歌々は、いずれも本書により確認できるから、紛れのないものである。

従来、諸資料より拾うしかなかった道家詠を、百首の形で実見しうる事、且つ他資料の記載を点検・批判しうることの意義は大きい。<sup>(11)</sup>  
本書の端作・位置には、

冬日詠百首 恋 製和歌

右大臣正二位近衛大将臣藤原朝臣道家

とある。正に詠進した本文(の写本)である事が知られる。なお道家は建保三年十二月十日に、内大臣から右大臣に転じている事、右に「冬日」とある事、並びに本百首の詠進期限は同四年二月五日であつたであろう事から、道家が進上したのは、同三年十二月十日以降年内一杯の間の或る時点、と絞ることが出来る。本書は近々翻刻紹介される由である。<sup>(12)</sup><sup>(13)</sup>

(9)『撰哥百首 家隆卿詠』について

高松宮藏(ほ・224・7)。本書は早く、『大日本歌書綜覧』に紹介され、のち久保田氏も触れられた。家隆の本百首詠を単独に伝えている本である。当然ながら、家集所載の百首(六九四・七九三)との関係が問われるであろう。写真版により、本書のもつ特徴や問題点を列挙してみろ。

① 本書の外題は右に表示した通りであるが、内には「百首和歌」の端作を持つ。ちなみに『玉吟集』所載の本百首には「百首和歌仙洞結句御百首」とある。両者に共通する「百首和歌(哥)」の名称のみを本来の形と見做すべきであろうか。仮りにそうだととして、「撰哥」「結句」等の呼称は誰の所為か、又、各々如何なる意味か等の疑問が直ちに生じるであろう。

② 巻末に次のような識語が見える。

右春夏秋冬恋雜之百／首者 上帝詔於臣等／百首和哥可撰之因

有勅／各奉自哥所進之詠／二三依被望使之筆而／遣之者也  
貞永三／五月望日 宮内卿家隆

記事に少し問題がある。まず年記であるが、寛喜四年四月二日改元されて貞永元年となり、翌二年四月十五日には天福元年に改元されているから、「貞永三」は不審であり、元年の誤写か、或いは貞永三年などの誤りであろうか。又、宮内卿とあるのも、仮りに貞永元年のこととして考えて、家隆の官職に合わせると、ここは前宮内卿とあるべきであろう。以上の疑点はあるものの、一応内容を信ずれば、家隆はかつて建保四年院に詠進した百首の自詠を(貞永元年と考えると)十六年後、二三望まれて書き遣した事が知られよう。

③ 歌数は百首に足りず、九十三首である。恋から雑にかけて脱落がある故である(後述)。部立名は春・夏・秋・冬・恋(右の理由により雑の字を欠く)とあり、各々「部」字を欠き、且つ歌数の表示は無い。これらは家集の形式と異なる点である。

④ 春に、排列上の欠陥が見られる。家集の番号で言うと、

(1) 694 695 696 (4) 707 708 709 710 711 (3) 702 703 704 705 706 (2) 697 698 699 700 701 (5) 712 713

の順に並んでいるが、原状では歌材の繋りに不自然さを來たすから、当然(1)・(5)の順に並ぶべきものである。即ち、錯簡であろう。

⑤ 更に目立つのは、他人歌が混入している事である。即ち「恋」一首目から九首目迄はそっくりそのまま秀能の詠であり、『如願法師集』六九・七七に一致する。やや細かく見ると、当の九首目は、人こころうつりもゆくか／あさかほのはなのうへなる／山ちならん

の如くあるが、「はなのうへなる」迄は秀能歌七七の第四句目迄に相当し、次の「山ちならん」は、家隆の本百首、雑の一首目(七

七九)の第五句に相当する。整理すると、恋部一首目〜九首目は秀能歌が紛れ込んだもの、この間、家隆詠としては恋部十五首全てを欠き、更に雑部一首目の第四句迄を脱している。以下雑の残り十四首は家集通りに存している。何がしかの物理的な原因を考えないでは説明し難い現象である。注意しなければならぬのは、右の如く混入している秀能歌は、建保四年百首の一部分に他ならない事である。先に見た忠信の場合と類似した現象であって、偶然の一致なのか或は深い子細あつての事なのか定かでないが、本百首を繞るテキストにこの様な現象が重なって見られるのは注意される。但し忠信の場合と、右の例との相違は、忠信の場合、他人歌の混入二箇所を除いてもなお、百首歌としての整序性を保っていないかつたのに反して、この場合は、混入部分を除けば、家集に見られる家隆の百首と狂い無く一致する事である。つまり、家隆の詠進した百首と本書の詠草とは、排列構成上は共通のものと考えられるのである。

⑥ 本書の本文は概して良くないのではなからうか。脱字(元の本にあったらしい)の箇所がやや多い。

⑦ 家集所収百首の本文と比べると、異同がやや目立つ。一首の趣意に相違を来すものではなく、字句の少異に止まるが、数はやや多い。これを如何に評価するかは少く問題になると思う。②の奥書の記載や⑤で付言した所などから判断すると、建保に詠進した百首と本書の詠とは別物ではない可能性が高いのであるが、表現の細部において違いが目立つのはどうか。享受の反映であつて、誤脱等により異伝を生じたに過ぎないのか、或は、改作や推蔽といった過程を伝えるものと造言えるかどうか。当然ながら作品解釈の問題に関わる。異同を考慮しつつ作品の読みを徹底する事によつて

検討されるべき課題であろう。今は問題点のみを記しておきたい。以上のように、建保四年百首の残存資料の内(先記した)②の、単行の百首二つについて、資料性の検討を概略行なつてみた。(3)の、百首が現存せず、諸集より拾ひ集めなければならぬものについては、既に久保田淳氏による所在確認の試みがある。今日(1)・(2)の経路によつて、作者十六人の内八人については百首を知りうるから、残存資料の確認や吟味は、自ずと残り八人について徹底されるべきである。久保田氏のうち、公経・実氏については千葉寛氏が、行意については、最近、藤田百合子氏がそれぞれ注意している。(15)忠信については幾分か問題提起を試みた。残る頼実・公継・通光・家長についての検討も続けられるべきであろう。

## 6

ところで、家集によつて建保四年百首の詠を確認できる七人の場合、各百首の資料性の吟味などは既に不要であるようにも思われるが、仔細に見ると、実は様々な問題が潜んでいるようである。以下要点のみを略記してみたい。

最初に、百首に歌が足りない例、逆に百首からはみ出す歌のある例に注意したい。秀能の場合、『如願法師集』所載の百首は、春一首、秋一首を欠いており、実数は九十八首である(二一九八)。端作・位署の書き様から見て、家集所載のものは詠進した百首の形態を保存していると考えられる。上つた詠草に既に欠脱歌があつたとは考え難いから、今見る欠脱は家集流伝の過程で、物理的な事情により生じたものであろうか。そうである場合は、原因はのちの享受の問題に関わるのだから、作者の与り知らぬ所である。一方、百首

からはみ出す歌は、やや問題を含む。のちの私撰集等の関連資料に、建保四年百首の詠として撰入されている歌で、家集には見えない歌がいくつが存在する。先に見た通り、本百首には、百首とは別に余剰として進上された歌もあったらしいから、家集不見歌はそれらとの関連も思われて注意される。後鳥羽院の場合、次の例がある。

建保四年人／＼によませたまける百首に冬のこゝろをよませたまける

後鳥羽――

(d)よをさむみねやのふすまのさゆるにもわらやのかせをおもひこそやれ  
(秋風集・冬下・522)

建保四年人／＼百首歌めしけるついでによませたまける

後鳥羽――

(e)いかにせむよそちあまりのはつ霜をうちらはふほとになりにつける哉  
(秋風集・雑下・1235)

(百首歌奉し時)

後鳥羽院御製

(f)なかむらん心まよひもよしなしと桜をよそにすくする白雲

(雲葉集・春中)

百首歌人々にめしける時

(g)をのつからふるきにかへる色しあらは花染衣露や分まし

(雲葉集・賀)

秋風集に後鳥羽院歌は三十二首入集している。うち本百首歌として載るものは(d)・(e)を含む七首、この七首の内(d)・(e)を除く五首は全て、御集によってじじつ本百首の作である事が確認できる(御集五一・五五九・五六三・五七〇・五七二)。(d)・(e)は本百首に係わる詠でありながら、現存する院の百首には見えない歌と、一先ず

は考えられる。但し(e)は、実は本百首詠ではなく、建暦二年十二月廿首会(五人百首)の折の詠である事を御集により知りうる(一四七一)から、秋風集の誤りとしなければならない。しかしながら(d)は依然として、御集不見の本百首歌と考えねばなるまい。(f)・(g)は雲葉集所載歌である。雲葉集に院の歌は三十四首入集、他に彰考館本付載の恋五中に一首見える。これらの内、本百首の詠と明記されていないが、(f)・(g)の如き詞書をもち、且つ御集によって本百首のものと知りうる歌が六首ある(御集五〇一・五二〇・五三五・五四三・五四七・五五九)。残る(f)・(g)が問題となる。(f)の詞書は前の歌の詞書による。同歌は家隆詠で、本百首の歌(七〇二)である。(f)も同じ折のものと推定される。(g)の次の歌は詞書空白で、歌は定家の本百首歌(一三九八)、(g)も又同様であると考えられる。(g)は統古今集に「建保四年人々に百首の歌めしけるついでによませ給ひける」として入集している(雑中・1682)。なお統古今では(d)の次に、詞書なく、道家の作がある。同歌は先に触れた『道家詠草百首』によって本百首の詠と確認できるから、(g)も同様である事がいよいよ確かとなる。以上の如く、(d)・(f)・(g)の三首は今のところ建保四年百首の詠で、なおかつ御集不見の歌と考えられる。ついでに言えば、慈円にも同様の例を一首見出しうる。

建保四年奉りける百首の歌に

慈鎮大僧正

身ばかりは猶もうき世を背かばや心は永く君にたがはで

(統古今集・雑下・1835)

これらの歌を、本百首の余剰の如きものとして把えることができずとも知れない。とすれば、詠進した歌人たちが余剰を進上したの

に相応するように、後鳥羽院にも又、そのような作があった事になろう。

## 7

彰考館蔵「忠信卿百首和歌」の紹介と検討に発して、建保四年百首を繞る様々なテキストの資料性を点検・批判するという所まで論を展開してきた。ようやく我々は、作者達の詠草の手前迄近づきえたが、何人かの作者についてはなお詠草の影すら覚束ない。

思えば、建保四年百首は、盛んな活動を見せる順徳内裏歌壇や道家和歌サークルの刺激を受けつつ、後鳥羽院が久方振りに催した百首歌であった。<sup>(20)</sup>『拾玉集』の伝えるところによれば、後鳥羽院の意向は、「返々可琢磨」「更不可交地歌皆悉可為秀歌」というものであったという。作者達の詠草は、そのような院の要請に対する解答に他ならない。さてそれらの作品個々の詩的水準や、本百首の担っている和歌史的位位置はなお十全に解明されていないと言ふべきである。<sup>(22)</sup>本稿では、そのような最も本質的な問いを考察する手前になお、資料性をめぐって検討すべき課題が多いことを確認したのである。

### 〈註〉

- 1 藤平春男『新古今歌風の形成』（昭44 明治書院）第一章Ⅳ、並びに「新古今時代歌壇出詠歌人索引」参照。
- 2 久保田淳『藤原家隆集とその研究』（昭43 弥井書店）「藤原家隆作歌年次考」以下、久保田氏の所説は全てこれによる。
- 3 安井久善『宝治二年院百首とその研究』（昭46 笠間書院）「宝治二年院百首作者伝」。安井氏の論考は、忠信の事蹟を纏めて説いた論として

は、従来唯一のものである。

4 夫木抄に九首入集。うち二首に「家集」の註記が見える。

5 忠信の位位置はむしろマイナーであったと言ふべきであるが、マイナーな存在を掘り起こし、当のマイナー性を位置づけることが当代の状況をより厳密に把握することにつながるだろう事は言う迄もない。忠信の和歌活動については他日を期したい。

6 更に又、(三)で見た「九人」という註記のもつ意味を考え合わせると、建保四年百首の詠として、九人の詠草を載せるテキストがかつて存在したのではないかと推測されるのであって、この勘註は一段と興味深いものに映る。

7 ちなみに定家の場合を例示する。「春日同詠百首応 製和詞／参議從三位行治部卿兼侍從伊与權守臣藤原朝臣定家上」

8 万代集は丹鶴叢書、新勅撰集は岩波文庫（番号は国歌大編による）。参考歌として、甲には／宮城野の萩や牡鹿の妻ならん花咲きしより声の色なる／（千載集・秋上・248・基俊）、乙には／いくかへりなれてもかなし萩原や末こす風の秋の夕暮／（定家・正治二年院初度百首・939）を挙げうるか。

10 甲・乙が同一の百首の秋部に並んで位置することも考えにくいと思われる。

11 3章に引いたように、例えば新勅撰集の詞書に本百首の詠と明示していないものの中にも、実は本書により確認できる歌がある。同様のケースは夫木抄にも見られる。同抄に、建保四年百首の歌であると註して入っている道家歌は八首あるが、別に「百首御哥」とあって、実は本書により、同百首の詠であることが知られるという例もある。

12 本書は伝為家筆。

13 田村柳菴氏による。

14 国文学研究資料館蔵の紙焼版（C48）による。

- 15 千葉寛「西園寺公経年譜——鎌倉期歌壇における西園寺家の研究(一)——」、『立教大学日本文学』第32号 昭49・6、同「西園寺実氏年譜」(同第36号 昭51・7)、藤田百合子「僧正行意について——建保期の一僧侶歌人——」(『国語と国文学』昭55・12)

16 通光の作は、久保田氏の指摘にある純拾遺33・純拾遺説の他に、万代集・秋風集・雲葉集より(重複を除いて)二首、計四首を、家長の作は夫木抄より九首を各々拾いうる。頼実・公継については諸資料に本百首跡を見出せない。この二名は最終的には詠進しなかった可能性もあるのではないか(この点については別途に論じたい)。

- 17 秋風集は、安井久善校、古典文庫260(昭44)に、雲葉集は群書類従第二十輯による。

- 18 (d)は純後撰集に、題しらず、後鳥羽院の作として入集している(雑上・109)。

- 19 既に久保田氏が所在を示した歌。初句「身ばかりは」は拾玉集384・3108にも見える。なお多賀宗準『慈円の研究』(昭55 吉川弘文館)27頁参照。多賀氏の読みに従えば、この歌には、慈円と後鳥羽院の疎隔という状況が反映していることになる。

- 20 <後鳥羽院歌壇・史>という脈絡で見ると、本百首は、千五百番歌合の百首に続く百首歌の催しであり、且つ百首としては最後のものということになる。本百首成立の経緯については久保田氏を参照。

- 21 「秀調百首草」の註記。私家集大成・中世Ⅰの本文による。院の意向の含みも意味やその位置を掘り起こすことは一つの重要な課題である。

- 22 本百首における定家・家隆の「詠風」については、岩崎礼太郎氏の論考がある。『新古今歌風とその周辺』(昭53 笠間書院)第四章・5参照。

#### 〈付記〉

翻刻を許可された水府明徳会影考館に深く御礼申し上げます。

\* 校正にあたって、若干の余白を見出したので、一言補っておきたい。

本稿が印刷にかかっている途中、和歌文学会例会(昭56・1・24、日本女子大学)において、本稿の骨子を口頭発表した。その折、諸氏より有益な批判・教示を賜った。筆者は、紹介した資料に見える五十四首の内、秀能・雅経歌を除く四十一首を、坊門忠信の詠作であると推定したのであるが、これに対して福田秀一氏より、本資料がやや特異な形態を示しているのは、転写される間に物理的な事情が働いた所為かも知れない事、四十一首を忠信詠と見るにはなお明徴を欠く事、極端に云えば、冒頭の一首は忠信詠でありえても、残りは別人の歌であるかも知れない事等の指摘があった。久保田淳氏よりも同様の発言があり、更に、建保四年百首について秀能・雅経そして忠信といった院近臣の、撰歌集あるいは撰歌百首の如きものの編まれることがあって、影考館本はそのようなものの名残りかも知れないという趣旨の意見が提出された。筆者としては、本稿の如き推定はなお且つ成り立つと考えるが、更に検討を要することは、両氏の指摘の通りであると思う。次に、3・4章で述べた、本資料に見える「忠信詠」を建保四年百首の「余剩」かとする仮説に対しては、田村柳杏氏より、混入している秀能・雅経詠は詠進した百首の一部に他ならないのだから、忠信詠のみを「余剩」と見るのは疑問である事、又、本百首の枠からはみ出す歌(本百首歌として伝わっていて、なお且つ各家集に見えない歌)を重視する説に対しても、なお資料の吟味が必要である事、その他、本百首の細部についての詳細な教示があった。本稿では一応の仮説を提出したのであるが、なお確かな証左が必要であろう。惣じて本百首については検討すべき課題が多いと言えよう。諸氏の御教示に感謝申し上げます。